

ベリーショート賞

## 贗作まくらおとし図

此礼木富嘉

私は、人を殺したかもしれない人を知っている。その人は私にとつて、世間からすると遅かったかもしれない初恋の相手で、当時の私は何かと彼女に振り向いてもらおうと躍起になっていた。

彼女との出会いは唐突だった。高校二年の頃だった。その頃の私といえば、高校に行くよりも喫茶店でプレスリーを聞いている方が好きだった。かといって愚連隊のような連中とは連む気もなく、曇つてさえいそうなタバコの臭いの充満した喫茶店でプレスリーやボブ・ディランを聞きながらドストエフスキーを読む、不良的でありながらインテリであろうとした青年だった。

私はその日も高校を休んで喫茶店に向かい、夕暮れ時に帰宅しようとして会計を済ませて戸を開けた。そのとき目の前を黒くすくめの人影が横切ったのを見た。その手にはさび付いて、とても動きそうにない扇風機を小脇に抱えていた。真っ赤な麦わら帽子に真っ黒なワンピース姿で一番目を引いたのは、透き通るような顔の白だった。私は一瞬で心を引かれ、その女性に声をかけた。

「手伝つてくれるの?」

私が返答に困っていると、彼女は追い打ちをかけるように「帰るところなのだけれど、あなたも来るかしら?」

と言った。絵画のように整った顔立ちで青い目だったが、日本人の顔だった。私はそのまま彼女について行き、彼女の家の惨状を見て、彼女の容姿とのギャップにいつべんに惹かれてしまった。

その後の私といえば、高校に行くよりも彼女の下宿先に足繁く通っていたものだったけれど、今思い返すと、高校にも行かずに彼女の部屋に足を運ぶ生活にも決して後悔はないものだと思ふ。

「今の私には、あなたが必要かもしれないわ」

彼女はそう言つて私を迎え入れてくれた。だが同時に「いずれ私は孤立し、独立独歩するようになるわ」と断言した。

「群れられるのも若いうちだけね」

とも言っていた。

その日、私は三日ぶりに彼女の部屋を訪れた。学校は試験の期間中で、さしもの私も勉強で忙しく、彼女の部屋からは遠のいていた。

「アラ、久しぶりね」

彼女の部屋の扉を開けると、まず目に入ったのは自転車のチェーンだった。そしてそこから視野を展開すると、どうやら自転車、それも誰かの自転車を持ち込んで、部屋の中でばらばらにしていたらしい。ほかに、何に使われていたのかわからないような金属金具や、ビー玉を一回り大きくしたようなガラス玉など、部屋の中はまさにケイオスだった。

彼女の蒐集癖は今に始まったことではないらしい。彼女に言わせれば、外を何気なく散歩している間に目にとまったものを、実に計画性無く持ち帰っているそうだ。実家では片付ける者もなく、部屋の中には鳥の巣のように絡みあった何かの金属フレームやゴムチューブなどで大変なことになっていたらしい。当時の彼女の下宿の掃除は私の役目となっていた。

「また捨てちゃうの？ もつたないし、徒労よ？」

彼女はすました顔で言う

「どうせまた積み上げるもの」

と言った。私は、人間なのだから文化的な部屋に住むべきだと主張するのだが、彼女は返事の代わりに誇らしそうな顔で、「今日はそれ、その、自転車のフレームの上で眠ったわ。良い眠りだったわよ、なんだって自分がキスされる夢を見たのだから」

ら」

とうとうとりとした目で言った。彼女は布団ももっておらず、枕に頭を乗せているのを観たことも無かった。私が、それは誰とだい？ と聞くと彼女は

「やっぱり気になるかしら？」

と意地悪そうな顔でこちらを見つめる。青い目が潤んでいた。「心配しなくてもいいわ、ちゃんと相手はノッペラボウだったのだから」

と残念そうに言った。ノースリーブのシャツの、あらわになつた白い肩に赤いフレームの跡を見いだすと、私は胸が締め付けられる思いがした。

彼女は腰のあたりまである黒くて長い髪を、時折ポニーテールにしたり下ろしたりしながら日々の装いを変えていた。つややかな彼女の髪は、さぞ手入れが大変だろうと思えたが、私は彼女が風呂に時間を費やしていたことを見たことがない。

「今日はお暇かしら、学生サン？ 喫茶でも行かないこと？」

彼女は部屋の片隅で膝を抱えながら、掃除をする私に向かつて言った。その日の高校はすでに出席する気もなく彼女の部屋に来ていたし、ちょうど昼頃だったので、私はその意見に賛同した。

「じゃあ先に外に出ていて頂戴。軽くシャワーを浴びてから行くわ」

と彼女は言った。

「何なら、一緒でもいいのよ。」

彼女が言うと、私はきまっぺどぎまぎしてしまい、赤面しながら彼女の下宿先を離れることしかできなくなる。彼女の下宿先に泊まったことも多々あったが、彼女は決して私に身体を許さなかった。私が、ほかの男もこうやって部屋に連れ込んでいいのか、と聞くと、

「そう思う？ 確かめてみる？」

と聞き返してくる。私は狡いと思った。

彼女はものの十分程度で部屋から出てきた。黒のロングTシャツに紺色のパンツ、赤い麦わら帽子の出で立ちだった。吸い込まれてしまうような濡れ髪だった。

喫茶に誘ったのは彼女だったが、彼女のアメリカンコーヒーマシンは一向に減らず、私はレモンティーを飲みながら、体調が悪いの？ と聞いた。

「そうね、それもあるけれど」

彼女が言うと、

「お父様の体調の方が問題ね」

と続けた。私は勝手に彼女のことを良家の令嬢だと思っただけで、六畳畳敷きに三畳の台所、風呂はあるがトイレは共用の彼女の下宿先は世を忍ぶ仮の住まいなのだと思っていた。父親が病に伏しているなら一度実家に帰ってはどうか、と提案してみると、彼女は少し返答を渋りながら

「近いうちに帰るかもしれないわ」

と言った。

「まくらおとして死にたい、と言っのよ、お父様が」

と言った。私が、まくらおとは何なのだ、と尋ねると、彼女は黙って、だまっただまっずつとコーヒーマシンの水面を見つめていた。

「病気よ」

彼女がようやくとコーヒーマシンに口をつけたところで、彼女がまっすぐに私を見て

「プライベートな話だから、誰にも言わないで頂戴」

と言ってから、じつと私の顔をみるのだ。私が首肯すると、彼女は

「まくらおとしてはね、寝ている人の上に枕を置いて、その上に乗って眠らせる、『病気』よ」

と言った。そして

「暗い因習よ」

と言った。

「私の曾お爺さまのお父様がね、まくらおとして死んだつきり、私の知る限り実際に行われたことはなかったわ」

彼女はコーヒーマシンを飲んだ。水面が揺れている。彼女の左手が震えていた。

「お父様はね、もう二年も患っていらっしやるのよ、最初こそ強気だったけれど、やっぱり駄目ね、人間って、弱くて」

彼女は壁に目を向けると、「いい絵ね」と言った。壁にはどこか、歪に描かれた人物画が掛けてあった。私はそのとき、これはゴッホに似せているのだ、と思った。でも今考えるとあれは死人の顔だったのだと思える。当時の私はレモンティーの味も考えられないほど呆気にとられていた。

「お母様は力が弱い。私は力があるほうじゃない？ だからね、帰らなければならぬ、それはそれは複雑なのよ」

私は思い切つて、それは殺人じゃないか、と小声で言った。

「まくらおとしは殺人ではないわ、『病氣』よ」

彼女は言った。笑みを浮かべていた。自嘲するような笑みだった。

「私はお父様とだけ連絡をとっているの。お母様は私の居所も知らないわ。お父様だけが知っている。高等学校まで行かせてくれたのも、お父様のおかげなの」

彼女が言う。

「だからね、もしお父様から連絡が絶えたら、それはそういうことなのよ。それを心のどこかで望んでいる私自身が憎いわ」と言う。私が、お父上は助からないのか、と聞くと、彼女は「無理ね。もう長い煩いな」

癌なの、と付け加えた。私が息をのんでいると、彼女は震える左手に気づいたのか、そつとコップを置き、右手で左手を撫でた。

「私はね、お父様が好きよ。でも、まくらおとしは親戚ほかで

はなく、私にして欲しいって、お父様のお願いは聞きたいけれど、聞きたくないわ」

と言った。私が、そんな願いは聞くべきではない、と主張すると、彼女はうつむいて

「ええ、そうね、ええ」

と言つたつきり黙ってしまった。私が再度、それは殺人だ、と言うと、彼女はもう何も応えなかった。

その夜、私の家に電話があった。母が取つたのだが、彼女の名を告げたので私が急いで受話器を取つた。日付が変わろうかという時間であった。

「お父様から、実家から電報があったわ」

彼女の声は枯れていた。

「今夜がヤマなのだそうよ」

彼女の声は震えていた。私が、今どこにいるのだ、と聞くと

「実家のある街の、公衆電話よ」

と応えた。

「震えが止まらないのよ」

彼女が言つてきた。私は何も応えられなかった。

「お父様からの呼び出しだったわ、電報。私はこのこと帰つてきた。私はどうするべきなのかしら」

私は、看取るべきだと言つた。そして、まくらおとしはするべきではないと言つた。

「ええ、でも、お父様のご意志なのよ」

彼女は言った。涙声だった。

「私はね、私はね学生サン、私は、お父様の気持ちが変わるわ」  
私は固唾を飲んで聞いていた。

「まくらおとして死ねたらどれだけ楽かと、私は、お父様が苦しんで、養老院を薦められて断固として断って、毅然として、でも線が細くなつていくお父様を見るのが、だから私は学校に逃げたのよ、私は、お父様のお気持ち」

私は黙っていた。何も言えなかったただだったが、黙るという選択をした。

「ねえ学生サン、私は、私は行くわ。お父様のもとに参るわ。ねえ学生サン、私に力を貸して頂戴」

私は黙っていた。彼女が鼻水をすする音だけが受話器から聞こえてきた。私は一言、いつてらっしゃい、と言った。彼女は最後に一度大きく鼻水をすすると、ガチャリと電話を切った。それっきりだった。

翌日、彼女は下宿先に居なかった。私がその後数日空けてから改めて彼女の下宿先に顔を出すと、彼女はけるとした顔で、相変わらず透き通るような白い顔で

「あら、いらっしゃい、久しぶりね」

と言った。部屋の惨状は拍車がかかっていて、針金ハンガーや何かの小さなねじまで、金物屋を開けるような状態だった。

「私もいつまでも青臭くはしてられないわ」

私が、部屋を散らかすことが大人への道なのかい、と聞くと、彼女は笑みを浮かべて、

「そうよ、ここから私の生活が始まるのだから」

と言った。朗らかな笑みだった。私は、高校を出たら働きたそうと思うことと、卒業したら結婚しようと告げた。彼女は一瞬呆けた表情を見せたが、すぐに表情を崩した。泣き顔なのか笑顔なのか曖昧な表情で、彼女は

「あなたが私のつがいったのね」

と言った。

それから私たちは結婚し、子供を三人授かった。三人とも娘で、今は嫁に行っている。彼女はそれからも蒐集癖が直らず、部屋の散らかりようは娘にも伝染したようで、私は必死になって娘たちに花嫁修業として部屋の掃除をたたき込んだ。

彼女はその後、末の娘が嫁に行った後で急激に老け込み、それと同時に部屋のごたつきも納まつてきた。私は一度は安堵したが、彼女が病に伏せてからは急に深刻に感じている。彼女にゴミ拾いを勧めてみるも、彼女は病床から曖昧な笑顔を送ってくる。柔らかな布団の、柔らかな枕の上から向けられるその笑顔が怖く思えて、かれこれ二年になる。

二年、彼女が病に伏せてから、二年である。

私は、彼女がいつ「まくらおとし」のことを切り出すだろうと、静かな覚悟を決めながら毎日を過ごしている。そのことを

考えるたび、私が思い出すのは、あの喫茶での彼女の震える左手と、奇妙にゆがんだ人物画なのだった。

へ了へ